個に応じたキャリア教育を実現するための ファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅡ

── 人間力を育成するための教養教育を目指して ──

玉田　和恵*　・神部　順子**
海老澤邦江***　・八木　　徹****
波多野和彦*****・古里　靖彦******

要　約

本研究では，個々の学生の人間性と感性を磨き社会人基礎力を育成するために，キャリア教育カリキュラムの中でさまざまな工夫をした実践を行った。人間性を磨くために「リーダー研修会」「特別講演会」「企業訪問」「インターンシップ」「長崎研修」，感性を磨くために「デジタル絵日記」「百人一首・源氏物語のデジタル絵巻」「早朝英単語学習」「ニューヨーク研修」「映画会」，協力を要請するために「保護者会」を実施した。それらの取り組みの中で，学生は「デジタル表現力」「礼儀やマナー」「感謝の気持ちを表現することの大切さ」「人としての生き方」について多くのことを学んだ。

1. はじめに

現代社会で，若者は，複雑化する世の中の動きを的確に捉え，積極的にそのメンバーとして関わっていくための“生きる力”を獲得することが求められている。そのためには大学時代に，社会の中での自己のあり方を認識し，より高いものを目指して知的訓練を行う必要がある。大学には，幅広い視野から物事を捉え，高い倫理性をもって的確な判断を下すことができる人材を育成することが求められている。具体的には，専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法などの知的な技法，人間としての在り方や生き方についての洞察，現実を正しく理解する力などを涵養することが課題となっている（文部科学省 2002）。

一方，ビジネス社会から若者への要請を検討すると，近年実施されている「企業が採用時に重視する能力」や「経営者が欲しい人材像」に関する調査等を踏まえて，以下の 3 つの能力を含む社会人基礎力（図 1）を育成することが求められている（経済産業省 2006）。

・人と関係を作る能力
・課題を見つけ，取り組む能力
・自己をコントロールする能力

従来，これらの能力は子どもが大人になるプロセスの中で，家庭や学校，地域社会の中で自然に身につけてきた項目であるが，現代社会では，少子化や近隣との関係の希薄化などにより，自然に習得する事が困難になってきている。そこで，社

2009 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学　情報文化学科准教授　教育工学
** 江戸川大学　情報文化学科准教授　情報科学
*** 江戸川大学　情報文化学科教授　イギリス詩
**** 江戸川大学　情報文化学科専任講師　情報化学
***** 江戸川大学　情報文化学科准教授　教育工学
****** 江戸川大学　情報文化学科教授　e-ビジネス

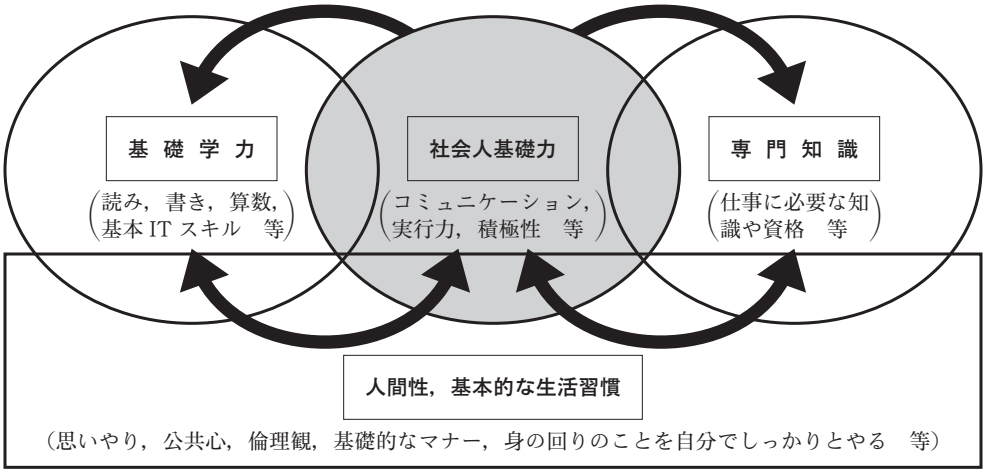

図 1　職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力
出典：社会人基礎力に関する研究会 ── 中間とりまとめ ──。

表 1　情報文化学科キャリア教育カリキュラム

	動機付け（心）	自分を鍛える（体）	テクニック（技）
1年 基礎ゼミナール 情報文化基礎	面談 ・入学の目的 ・将来の目標（どんな仕事につきたいか） 面談 ・目標に向って，勉強できているか	・基礎学力を身につける ・専門基礎科目で，基礎的な能力を身につける ・情報，語学のリテラシ科目で，基礎的なスキルを身につける	・デジタル表現力を身につける
2年 情報文化演習	面談 自分の将来像を知る ・IT 関連業界人を招いた懇談会（定期的に） 面談 先輩から学ぶ（就職体験談）	・一般常識を身につける ・専門基礎科目で，基礎的な能力を身につける ・情報，語学のリテラシ科目で，専門スキルを向上させる ・コミュニケーション能力を身につける ・自己分析の訓練	SPI，一般常識 模擬テスト ・引率つき企業訪問 ・インターンシップ ・業界＆職種研究のやり方 模擬テスト
3年 専門ゼミナール	面談 ・IT 業界人事担当者の話 ・業界人を招いた懇談会(定期的に) 面談 ・最終志望の確認 ・随時進路相談	・専門科目で，専門性を磨く ・仕事に必要となる論理的思考力，問題解決力を身につける ・自己分析の訓練 ・グループディスカッション（集団での問題解決）	就職活動の基礎知識 ・エントリーシート 模擬テスト ・履歴書の書き方 ・自己 PR の訓練 模擬テスト ・人事担当者を招いて模擬面接
	（目標）ここで，内定		
4年 卒業研究	面談 ・「内定ブルー」対策 ・職業人としての心構え 面談	人間として，社会人として生きていくための力を身につける 『人間陶冶』完成期	・仕事をするということはどういうことか ・新入社員の ABC

会に若者を輩出する大学では，「基礎学力」（読み，書き，算数，基本 IT スキル等）や「専門知識」（仕事に必要な知識や資格等），「人間性，基本的な生活習慣」（思いやり，公共心，倫理観，基本的なマナー等）とともに，社会人基礎力を育成することが喫緊の課題となっている。

このような状況において，情報文化学科では，ファカルティ・ディベロップメントの取り組みとして，社会人として生き抜くことができる人間力を育成するという視点から，個々の学生に応じた指導を実践するためのキャリア教育カリキュラム（表 1）を構築して，実践している（玉田ら 2008）。当該カリキュラムでは，就職するという強い意志を持たせ，世の中の厳しさを認識させる「動機付け（心）」，就職するために必要となるスキルを身につける「テクニック（技）」，それから大学で学ぶ上で最も重要な基礎学力・専門性を磨く「自分を鍛える（体）」という 3 つの点に重点をおいた指導を行っている。これらの活動の中で，前述の大学教育に求められる教養や社会人基礎力のある程度の部分は網羅できるが，これまでの視点だけでは，人間としての在り方や生き方についての洞察，現実を正しく理解する力，人と関係を作る能力，自己をコントロールする能力等を育成することについては十分と言えない。

そこで，本研究では上記のような能力を育成するために，情報文化学科での教育のあり方について再検討を試みる。

2. 情報文化学科の教育

2.1. 学科における教育理念

江戸川大学の教育理念は，「人間としての優しさに満ち，普遍的な教養と時代が求める専門性により社会貢献できる人材の育成」を目指す「人間陶冶（とうや）」である。これは 1 章で述べた大学教育に求められる教養や社会人基礎力の育成と共通する理念であると解釈できる。情報文化学科での教育も，この教育理念にのっとって行われている。特に「マナー→学問→就職」という標語の基に，マナーを磨き学問を行い，社会人としての人間力を身につけ全員就職することを目指している。

また，情報文化学科の特性として，進路として Web デザインや広告デザインなどネットワークや広告媒体などさまざまなメディアでの表現力を必要とする職業を目指す学生が多いことが挙げられる。そのため，感性や表現力を育成することが情報文化学科の教育として必須と考えられる。

大学教育に求められるさまざまな要請と，情報文化学科の学生の特性に応じた教育を実現するために，以下の目標を達成することのできる教育方法を検討する。

① 人間性を磨く
　(ア) 人間としての在り方や生き方について考えさせ，人と関係を作る力，自己をコントロールする力を育成する
　(イ) さまざまな課題を発見し，取り組み，問題解決する力を育成する
　(ウ) 情報を収集・分析し，社会の動きを見据えて現実を正しく理解し判断することができる力を育成する
② 感性を磨く
　(ア) 感性を磨いて，自分の意図を相手に伝えることができる表現力を育成する

2.2. 授業での取り組みと特別活動

具体的には，表 1 のカリキュラムにあるように，さまざまなキャリア教育の実践の中で，人間性や感性を磨くための取り組みを行っている。

授業科目の中では，各教員が，人としてどう生きるべきか，礼儀やマナー・人への感謝の気持ちの大切さについて熱く語っている。また，多様に複雑化した社会の中で，社会人として問題解決をしていくためには多くの情報を取り入れること，特に本を読むこと，新聞やニュースを見ること，映画や音楽を聴くことの大切さについて力説している。そして，授業などで人の話を聞く場合には，必ずメモをとることを徹底指導している。各授業での指導だけでは達成できないことや，さらに個々の学生の力を伸ばしたい内容については，特別活動として授業時間外に実施している。主な内容は以下の通りである。

【人間性を磨く】
・リーダー研修会
・特別講演会，企業訪問
・インターンシップ
・長崎研修
【感性を磨く】
・デジタル絵日記
・百人一首・源氏物語
・早朝英単語学習
・ニューヨーク研修
・映画会
【協力の要請】
・保護者会

3. 人間性を磨く特別活動

3.1. リーダー研修会

情報文化学科として，人との関係を作る力や，課題発見・問題解決力を育成するための取り組みを実践し，学生の社会人基礎力を育成するためには，その中核となるリーダーの存在が不可欠である。例えば，リーダーが1学年100名の同級生を動かし，まとまりのある活動をしたり，あるいは，ある学年が中心となって学科全体を動かすような活動を通して，人との関係の作り方を修得したり，課題を発見し取り組む中で，人を動かすことの大変さや，問題解決の難しさを身をもって学ぶ活動が重要である。そこで情報文化学科では，それらの実践の場として各学年10名前後のリーダーを養成し，学園祭を中心とした取り組みを実践している。

実際の取り組みとしては，各学年週1回の研修会が開かれている。そこには，関係する教員が必ず参加し，講話を行っている。内容としては，挨拶や感謝の気持ちの大切さ，人としての在り方，生き方について，新聞やテレビなどから情報を収集することの大切さ，社会情勢についての啓発，歴史・文学・美術などへの興味関心を引き出す話など，リーダーの人間性や感性を育てるための視点でさまざまなことが語られている。情報文化学科では，人の話を聞く場合にはメモを取ることが徹底されているため，リーダーは先生の話を聞き逃すまいと，一生懸命メモを取り，自分たちがさまざまな活動をするためのヒントや資料としている。また，社会情勢を知るためには新聞を読むことが基本であるため，参加学生には毎朝新聞を読んでくることが徹底指導されている。

リーダーは，学園祭の企画・実施方法の検討，さまざまな準備を通して企画を実現，イベントの

写真1　メモを取りながら話を聞く様子

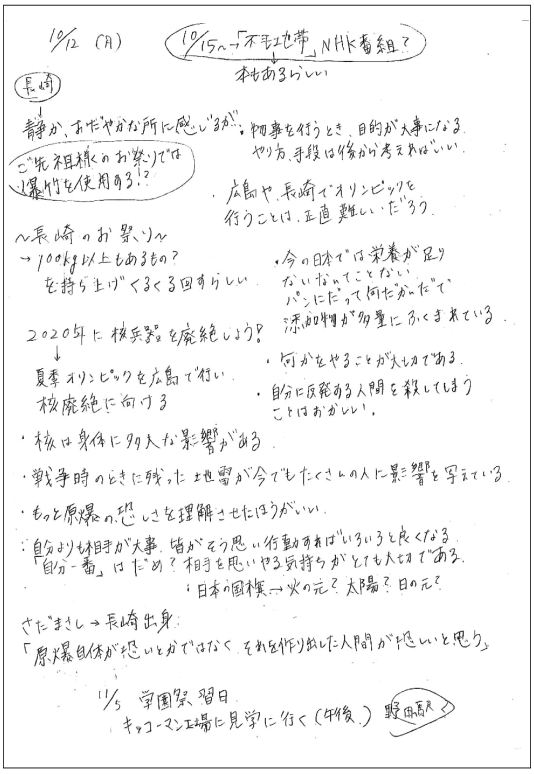

図2　ある学生のメモ

運営，評価を行う。また，その他，学科主催のさまざまな行事の運営や補助も行っている。これらの活動を通して彼らは，人間性，感性ともに著しい成長を遂げている。

3.2. 特別講演会・企業訪問

学生の人間性を高めるためには，社会の第一線で活躍している方々の生き様に直接触れることが効果的だと考えられるため，特別講演会を実施している。今年度招聘した講師は表2の方々である。就職活動や社会人になるという視点に限定せず，人として自分はどう生きてきたか，またどう生きるべきだと考えているか，地球規模で生き物としての人間はどうあるべきかなど，学生自身がこれから自分自身の生き方を考えていく上での糧になるような幅広い教示をいただいた。

また，本年度は企業訪問として，キッコーマン野田しょうゆ工場を訪れた。自分の身近に接している「もの」が，どのような工程で作られているのか，そこでは，どのような人々がどのような仕事をしているのかということを，大学生として実際に自分の目で確かめる活動である。学生は，大学の講義では修得することのできない，さまざまな社会の現場についての理解を深めることができた。

表2　特別講演会　招聘講師

NHKメディアテクノロジー取締役	吉中昭夫氏
文化放送社長	三木明博氏
茨城大学大学院理工学研究科教授	高妻孝光氏
三菱重工空調システム株式会社元社長（現　株式会社ドリーム社長）	岡　　博氏

写真2　三木明博文化放送社長の講演

3.3. インターンシップ

実際に，職場で仕事を体験することは，社会に出るために自分がどのような力を身につけておかなければならないかということを実感するために有効である。2009年度も多数の企業が，情報文化学科の学生をインターンシップとして受け入れてくださった（表3）。学生はそこでの活動を通して，「職場での人との関わり方」「課題にどう取り組むか」「どうやって問題解決をするか」「自分にどのような力が足りないか」「何をこれから学ぶべきか」など，さまざまなことを修得した。

表3　2009年度インターンシップ先

㈱NHKメディアテクノロジー	2名
㈱文化放送	1名
丸紅情報システムズ㈱	1名
三菱重工空調システム㈱	1名
㈱エイチ・アイ・エス	1名
ローム㈱	2名
㈱JCNコアラ葛飾	2名
いちかわケーブルネットワーク㈱	1名
㈱ケーブルネットワーク千葉	2名

写真3　インターンシップの様子
（㈱NHKメディアテクノロジー）

3.4. 長崎研修

人としてどう生きていくべきかということを深く考えさせるために，毎年８月に第２次大戦時に原爆が投下された長崎への研修旅行を実施している。今年度は，大浦天主堂や原爆資料館の見学，被爆体験談の傍聴により平和についての意味を考えさせた後，田上富久長崎市長と直接面談をして，平和についての懇談を行った。

懇談の冒頭で，田上長崎市長は「さまざまなことが目まぐるしく変化していくなかでも，時代が変わっても変わらない大切な価値，大切なものがある。闇から目をそらさず，闇を見ることで光の大事さを知っていこう」とお話をされた。懇談の中で，平和の大切さ，戦争の悲惨さ，そこで落とされた原子爆弾の悲惨さ，それを乗り越えて生きている人々の姿をほとんどの学生が初めて知り，平和というものが自分にとって切実な課題なのだということを痛感することができた。

また，最後に田上長崎市長が話された「いつも受け身になるのではなく，小さくてもいいから自分がエンジンになるという気持ちで，これからの人生を考えていこう」というメッセージについては，参加した学生の心に強く響き，真剣にこれからの生き方を考えていく上でのヒントになったようである。

長崎研修旅行では戦争や平和は他人事ではなく，自分の問題として捉える必要があり，新聞やニュースなどから世の中の正しい情報を常に取得し，自分の中で整理し，自分自身の意見をきちんと持つことの大切さを学ぶことができた。

写真４　田上長崎市長との平和懇談会

4. 感性を磨く活動

4.1. デジタル絵日記

情報文化学科では，進路として Web デザインや広告デザインなどネットワークや広告媒体などさまざまなメディアでの表現力を必要とする職業を目指す学生が多いため，感性や表現力を育成することも大きな教育目標となっている。

そこで，毎年夏休みに，デジタル絵日記を１年生の課題としている。１年生の段階では知識を詰め込むより，楽しみながらデジタルでのデザイン力を向上させることを重視している。それに加えて，日本語，英語での文章表現力を身につけさせることも目的としているため，夏休み中の出来事について，日本語５日分，英語５日分の絵日記を作成し，後期開始時までにエドクラテスにアップロードすることとしている。学生の表現には個性があり，さまざまなアイディアが工夫されており，今後才能の開花が期待される多くの学生がいることが分かった。また，年を追うごとに学生の表現力が向上しているように感じられた。

図３　デジタル絵日記

図4　百人一首をまとめた冊子の表紙

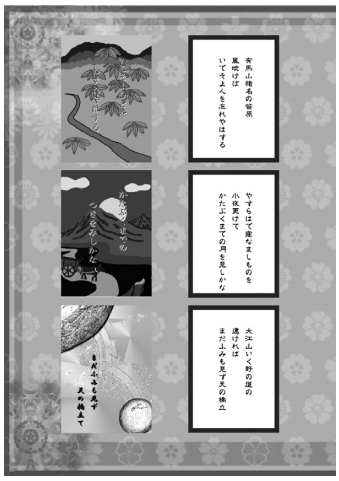

図5　デジタル表現した百人一首の絵札

図6　デジタル表現した源氏物語

4.2. 百人一首・源氏物語

情報文化学科では，毎年学園祭の企画として教員と学生が協力し合って，文化的，歴史的な作品をデジタルで表現している。

2008年度は，「百人一首」を取り上げ，百人一首の歌の情景を自分なりにデジタルで表現するという課題に取り組んだ（図4, 5）。

学生の表現したものには，歌に読まれている情景をそのまま風景画として表現したもの，時代背景を現代に置き換えて表現したものなどさまざまな個性があり，素晴らしい出来栄えであった。学園祭に展示した後，教師が現代語訳を付加して冊子としてまとめた。

2009年度は，「源氏物語」を取り上げ，54帖それぞれの情景を1枚の絵で表現した。今回は，絵巻物なので現代風のものが混在すると統一感がなくなるため，平安時代の時代背景を忠実に表現することを条件とした。また，自分が担当する帖の現代語の要約も学生自身が担当することとした（図6）。

これらの活動を通して，学生は，初めて真剣に「百人一首」や「源氏物語」などの日本文化に触れることができた。何かを表現するためには，多様な知識や教養を身につけておかなければいけないこと，時間がある大学時代に本を読んだり，美術に触れたり，音楽を聴いたり，さまざまな文化を体験することが，今後の人生の糧になることを学んだようである。

4.3. 早朝英単語学習

情報文化学科では，英語の感性を磨くために，緊急メール連絡システム【キャンパスモバイル】を活用した英単語の学習を毎朝行っている。

出題内容は，選択問題4題（一般常識に出てくる英略語1題，基礎的な動詞2題，名詞1題，形容詞・副詞1題）と，時事問題1題（日本語で記

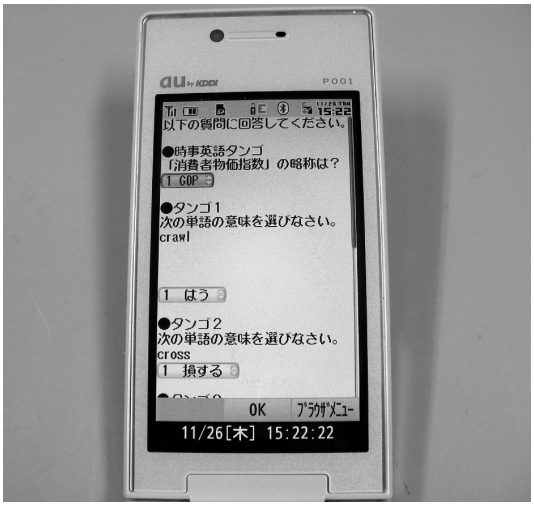

図7　キャンパスモバイルを活用した早朝英単語学習

入するもの）である。毎日英単語に触れることによって，英語力を向上させるとともに，英語に対する感性を磨くことを意図している。

学生の動機付けとしての活用と同時に，緊急メール連絡システム【キャンパスモバイル】を活用しているため，学生が即時に回答したものを教師が集計して，学生が苦手としている問題を繰り返し出題するなどの対応も可能である。

4.4. 映 画 会

昨今，若者は映画やテレビを見なくなった，と言われている。感性を磨くために，映画はとても良いものである。それを学生に伝えるために，定期的に映画会を開催している。特に，「名作に触れる」という視点から映画を選択している。教師が，映画の概要を紹介した後，映画を鑑賞し，終わったら映画の感想を記述するという流れで実施している。これまでに鑑賞した映画は以下の通りである。

- 招かれざる客
- 月の輝く夜に
- あした
- 精霊流し
- キューポラのある街
- 旅　情
- 椿三十郎
- 息　子
- アラビアのロレンス
- 若い人
- ゴッド・ファーザー
- ゴジラ

4.5. ニューヨーク研修旅行

感性を磨くためには，自分と異なる文化に触れること，本物の芸術に触れることが重要である。情報文化学科ではニューヨーク研修旅行を実施し，本場のオペラやミュージカルやさまざまな芸術や文化に触れる体験を行っている。それと同時に，国際的なビジネス感覚を磨くために，「丸紅国際株式会社」「NHK ニューヨーク支局」などを訪問し，国際的に活躍するビジネスマンとの交流も行った。

5. 協力の要請（保護者会）

少子化に伴い，昨今の大学生は非常にひ弱になってきている。大学生になっても，親から自立できず，独立心が持てない若者が多いと言うのは非常に残念なことではあるが，現状では，大学での教育を徹底するために，保護者の協力が不可欠である。特に就職活動をする場合には，学生だけの判断では不十分な場合も多いため，保護者の協力や助言が大切になってくる。

そこで，情報文化学科では，保護者会を実施した。「マナーを身につけ」「徹底的に学問を追求して」それから「就職に立ち向かう」という，学科の方針を保護者に伝え，家庭で協力して欲しいことについて説明した。保護者の関心は非常に高く，

写真 5　ミュージカル鑑賞（in New York）

写真 6　情報文化学科保護者会

こちらの予想をはるかに超す78名の保護者が参加した。保護者も大学での教育方針や学生の様子を知ることができ，満足したようである。アンケート調査を行ったところ，このような保護者会を継続して欲しいという回答が100%であった。

6. 学生は何を学んだか

2009年度の学園祭終了時に，学生が情報文化学科のさまざまな取り組みから何を学んだのかという調査を実施した。そこでの回答について述べる。

6.1. 社会人になるための知識・技術・態度

「社会人になるための知識・技術・態度として自分に何が身についたか」という問に対して，学生の回答で最も多かったのは，「挨拶ができるようになった」という項目であった。挨拶をすることは社会生活の基本であるため，情報文化学科では，挨拶の大切さについて折に触れて徹底した指導を行っている。学生にもそれが伝わり，身をもって挨拶の大切さを実感できたようである。

次いで，「メモを取りながら人の話しを聞けるようになった」と言う内容の記述が多かった。人の話を聞く場合にはメモを取るように，社会に出て上司や先輩から教えられたことについて，再度同じ質問をするようなことのないようにという徹底した指導を行っているため，その効果が現れたのだと考えられる。

次いで，「新聞やニュースを見るように心がけている」「デジタルでさまざまなものを表現する力が身についた」「リーダーとしての自覚や難しさを学んだ」という記述が多かった。

6.2. 人への感謝の気持ち

学生は，さまざまな活動の中から，自分が一人で生きているのではなく，さまざまな人に支えられているのだということを学んだようである。「これまでは自分で何でも勝手にやっているようなつもりになっていたが，その活動の裏で先生方がいろいろな努力をして下さっているのだと言う事がわかりました。感謝の気持ちをきちんと伝えなければならないということを学びました」という内容と同様の記述が多く見られた。学生は，さまざまな活動を通して，人に対する感謝の気持ちを実感し，その感謝の気持ちを相手に伝えることの大切さを知ったようである。

6.3. 人としての生き方

人としての生き方として，次のようなことを学んだという記述が多かった

- 礼儀の大切さ
- 目標に向かって向上心を持って取り組むことの大切さ
- 誠意には誠意でこたえる
- 素直な気持ちで生きる
- 責任をもって様々なことに挑戦する

礼儀の大切さについては，折に触れていろいろな場面で学習している。その中で，礼儀の大切さを，学生自身が身をもって痛感したようである。その他の項目についても，さまざまな取り組みの中で繰り返し言われていることである。学生は，情報文化学科の活動を通して人としてどう生きていくべきかという事を真剣に考え，社会人として生きていくために必要となる基礎力を体得したようである。

6.4. 就職内定先

実際に，さまざまなことを情報文化学科で学んだ学生はどのような内定を獲得したか，2009年度4年生の内定先を表4に示す。意欲のある学生は，インターンシップなどに協力し学生を受け入れてくださった錚錚たる企業の内定を獲得している。

7. まとめと今後の課題

本研究では大学教育に求められる教養や社会人基礎力の育成を図り，かつ，情報文化学科の学生の特性に応じた教育を実現するために，「人間性を高め」「感性を磨く」ことのできる教育方法を検討し，実践した。

表 4　2009 年度 4 年生の内定先

株式会社 NHK メディアテクノロジー（2 名）
株式会社エム・オー・シー
株式会社りそなホールディングス
日本建設工業株式会社（2 名）
NEC フィールディング株式会社
富士ソフト株式会社
株式会社キューブシステム
株式会社オープンストリーム
株式会社イワイ
株式会社コンピュータパック
株式会社ビックカメラ
株式会社ヨドバシカメラ
明治乳業株式会社
むさしのカード株式会社
株式会社イー・クラシス
新鑫国際株式会社

人間性を磨くために「リーダー研修会」「特別講演会」「企業訪問」「インターンシップ」「長崎研修」，感性を磨くために「デジタル絵日記」「百人一首・源氏物語のデジタル絵巻」「早朝英単語学習」「ニューヨーク研修」「映画会」，協力を要請するために「保護者会」などを実施した。それらの活動の中で，学生は「社会人になるための知識・技術・態度」「人への感謝の気持ち」「人としての生き方」について多くのことを学んだ。そして最終的に，意欲のある学生は錚錚たる企業の内定を獲得している。

今後は，さらに教育効果を高めるために，これらの活動の実施方法について詳細に検討をする必要がある。

謝　辞

本研究にあたって，さまざまな方々の協力をいただいた。特別講演会・企業見学・インターンシップにご協力くださった企業の皆さま，活動を支えてくださった江戸川大学教職員の皆さまに心から感謝の意を表します。

参考文献

赤堀侃司（1997）『大学授業の技法』，有斐閣選書，東京

ベネッセ　「大学生の学習・生活実態調査」http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/index.html（参照日 2009 年 11 月 10 日）

中央教育審議会（2002）　中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203/020203a.htm#06（参照日 2009 年 11 月 10 日）

大学審議会（1991）　大学審議会答申「大学教育の改革について」，文部省

経済産業省　「社会人基礎力に関する研究会　中間報告書」http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-reference.pdf（参照日 2009 年 11 月 10 日）

国立教育政策研究所（2007）『キャリア教育への招待』，東洋館出版者，東京

私立大学情報教育協会　「大学における教養教育」大学教員の授業改善白書 http://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2324/3_1.html（参照日 2009 年 11 月 10 日）

玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・古里靖彦（2008）「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組み」江戸川大学紀要『情報と社会』，19，293–303